

地域と協同の

2017年3月25日発行

151号

研究センターNEWS

巻頭言

第13回東海交流フォーラムに見た「ユネスコ無形文化遺産」

向井 忍

(地域と協同の研究センター専務理事)

久しぶりに前日からの雪で冷え込んだ2月11日。名古屋駅前のウインクあいちで開かれた第13回東海交流フォーラムは“個の力から生まれる地域の未来”への示唆的なメッセージにあふれていました。開催から1ヶ月を経て私が閉会挨拶でふれた意図をご紹介します。

基調講演にたった「草の根支え合いプロジェクト」の渡辺ゆりかさんは、地域や社会から排除されて孤立している人によりそう実践を紹介しつつ「わかっているけど、仕方がないよね」とは言わない、ご自身の姿勢を表明されました。事例報告で、三重地域のNPO「太陽の家」からは、貧困と虐待の当事者だった自身の体験から「子ども食堂」を始めた想いが語られました。岐阜地域、中津川の「認定NPOひなたぼっこ」からは、重度の障害ある方を24時間支援する職員の姿と意識の変化とあわせて自治体の姿勢も変えている実践が報告されました。尾張地域からは、1968年に入居が始まった高蔵寺ニュータウンにつくられた生協店舗を拠点に、高齢化してきた住民福祉への関わりを継続し広げていることが紹介されました。三河地域からは、奥三河中山間地で地元JA&生協組合員が住民として、農協・生協職員、行政や社協・保健センターと一体に交流の場をつくっている事例が報告されました。

各報告に共通して感じたのは、①子どもから障害者、高齢者まで、それぞれが関わられる居場所がつくられ、そこで世代と世代がつながっていること、②集まってくる空間(居場所)ごとに、ニュータウンや中山間地域を含めて、その地域の人々の一体性が再生産されており、③生きる権利や人としての尊厳が尊重され、生活文化と人の創造性が豊かにひろがる風景でした。ここで、ユネスコの無形文化遺産保護に関する条約第2条(定義)をみると「この無形文化遺産は、世代から世代へと伝承され、社会及び集団が自己の環境、自然との相互作用及び歴史に対応して絶えず再現し、かつ、当該社会及び集団に同一性及び継続性の認識を与えることにより、文化の多様性及び人類の創造性に対する尊重を助長するものである。」とされており、各報告の印象と重なることがわかります。ご存知の通り、昨年12月にドイツの申請により「共通の利益の実現のために協同組合を組織する思想と実践」がユネスコ世界文化遺産に登録されました。ドイツの申請では協同組合が世界100カ国以上に広がっていると触れられていますが、以上からもわかるとおり、無形文化遺産登録の意味は狭く協同組合に限定されるものではなく、人と人のつながりで地域社会の問題を解決しようとする多くの人々の生き方に光をあてたのではないのでしょうか。これからも変化が大きい時代です。渡辺ゆりかさんが語られたように「早く行くには一人で。遠くまで行くためには協同して」。東海交流フォーラムで誰もが感じた”一人ひとり人は人として生きている”という実感、“個人の尊厳の尊重”の価値観を協同の大元において、この先にむかっていけば・・・と感じた一日でした。(むかいしのぶ)

CONTENTS

地域と協同の研究センター 3月の活動

- 巻頭言：第13回東海交流フォーラムに見た「ユネスコ無形文化遺産」 <向井 忍> 1
- 寄稿：活用される研究センターへ、2月東海フォーラムに参加して <田邊凜也> 2
- 活動報告：生協と生協職員の仕事のことみんなで考えてみましょう！2 <事務局> 3
- 活動報告：地域の中での居場所・地域でほっとできる場所！「けいわっこカレー食堂」 <事務局> 4
- 情報クリップ、お詫びと訂正、お知らせ 5
- 企画案内と書籍案内 8

- 3月3日(金)組合員理事ゼミナール⑤
- 3月6日(月)NEWS編集委員会
- 3月8日(水)三河地域懇談会・世話人会
- 3月10日(金)研究フォーラム「食と農」世話人会
- 3月13日(月)尾張地域懇談会・世話人会
- 3月17日(金)共同購入事業マイスターコース企画委員会
- 3月18日(土)東海交流フォーラム実行委員会(まとめ)、第4回理事会
- 3月21日(火)国際協同組合デー企画相談会
- 3月22日(水)常任理事会、組合員理事ゼミナール世話人会
- 3月23日(木)くらしを語りあう会、第二期名市大寄付講義相談会
- 3月28日(火)岐阜地域懇談会・世話人会「ながら梅子の家」訪問
- 3月29日(水)協同の未来塾企画委員会
- 3月30日(木)研究フォーラム「環境」世話人会

活用される研究センターへ、2月東海フォーラムに参加して、

田邊 準也（地域と協同の研究センター理事）

2月11日、第13回東海フォーラムに参加しました。これまでの実りを実感した充実した会でした。

テーマ「よりよい“暮らし”をつくる地域のつながり！」は地域と協同の研究センター（以下、研究センター）発足の趣旨そのものでもあります。日頃見えにくい地域の暮らし、豊かなつながりの現状、困難、複雑さ、等を知るそして考える充実した企画でした。

これからのいっそうの充実が期待されます。

同時に、そのためにもこれからの研究センターにはこの成果を会員、とりわけ団体会員の共有財産にする、と言う研究センター発足以来の懸案に取り組むことが求められている、と思いました。

よりよい暮らしを実現する上では、とりわけ運動を進める上では暮らしの実情を知ること、考えること、話し合うことが欠かせません。一人だけではなかなか難しい、専門家、研究者の協力を得て共にすすめたい、研究センター発足の動機でした。その際、運動する組織、例えば生協にはもうひとつの動機がありました。考えることと実践することの矛盾を解決したいと言うことです。

生協運動は安心安全な商品を確認する運動です。そのために消費者は常に疑ってかかることが欠かせません。商品検討委員会などの試みはその一つです。

一方、日常的に商品を提供する、利用する際には常に確信を持つ必要があります。商品に限らず組織の方針、計画についても確信を持った実践と不断の反省が求められます。その両立は容易ではありません。

工夫の一つとして、常に実践を検証し、時に疑い、反省をする、そのために調査し幅広い情報を集める、そんな役割を担う研究センターと、その結果を活用しつつ個人としても組織としても確信をもって実践する、そんな関係が築けないか、と言う議論がありました。

そんな趣旨で研究センターには有志個人会員、団体会員の代表が集り研究者、専門家の皆さんと協力してその趣旨の活動が積み重ねられてきました。

そして研究センターの活動の成果は、会員、とりわけ団体会員にあってはその構成員、生協では組合員、職員一人ひとりが享受できるようにしようと努

力してきました。

然し実際には会員、特に団体会員の構成メンバーと研究センター活動の関係は決して密接ではありませんでした。研究センター自身先ずその活動を充実させることに集中しなければならなかったことでもあります。関係をどうするか充分検討してこなかったことも挙げられるように思います。

勿論、この間理事を中心にして三重、岐阜、三河、尾張ごとに地域懇談会等関係を密にするための努力が重ねられ、今回のフォーラムの成果につながっています。であればこそ、この関係をどうするか改めて集中して検討する、できる段階にきている、欠かせないテーマになっているのではないかと思います。研究成果の報告活動をもっと強める、その工夫をする必要は言うまでもありません。この間、学習会等多様な報告の試みもされています。

その上で報告内容をめぐって相互に討議するといった仕組みがなどの検討があってもいいように思います。

又、例えば生協との関係で言えば、やっぱり組合員、職員の最大の関心事である商品、事業について、ある意味での委託を受け、調査、研究、提言ができるような関係が強められる必要があるように思います。研究センターとの関係を考える上では不可欠のテーマだと思います。

ともあれ、関係論自体も研究テーマにされていいのではないかと、フォーラムに参加して私の感想です。

最後に一言、個人的な関心、要望です。

高齢者の生きがい、或いは社会的役割をもっと深めたいということです。福祉のテーマかもしれませんが、私自身が福祉の受容者となる場合の問題です。例えば介護を受ける場合の心構え、或いは仮に認知症になっても、寝たきりになっても尊厳を失わないための心構えといったものです。個人の心構え、ある意味贅沢なテーマかもしれませんが、でも、だからこそ研究センターで模索できないかと思うのです。

（たなべ じゅんや）

生協と生協職員の仕事のことみんなで考えてみましょう！ 2

2月17日（金）研究フォーラム「生協職員の仕事を考える」主催で、生協、そこで働く職員の仕事って外部からどう見えているか、中京大学現代社会学部の小木曾洋司先生（おぎそ ようし=写真）から問題提起をいただき、10人の参加者で考え合う場を持ちました。その一部を紹介します。（文責：事務局）

小木曾洋司先生の問題提起

はじめに

戦後から1980年代までの生協と、それ以後の生協置かれた環境が全く違うと感じています。その中で働き方も変わらざるを得ないところがあったのではと思います。80年代のバブル期、生協はバブルに乗ってしまった気がします。80年代にバブル期があり、グローバリゼーションがあり、それはみんな地域性をつぶし、あるいは地域性を超えて大規模化し、地域を画一化しました。その中で生協も拡大してきました。あのころきちんと足元を見るべきだったのではないかと思います。

労働と仕事（Labor と work）

近代の労働は、工業制で分業化された中で、一つの部品として働く労働「labor」と言われます。

「work」ではないわけです。近代の労働は「labor」で、労働者は人格は売らないけれど、労働力を売って雇われるという形で、苦役であり、そこに喜びというものはないものです。労働組合は苦役に対する防止抑制力であり、苦役の程度に応じて賃金をという形になってきます。

最近第一次産業でもサービス業でも分業がかなり徹底化しており、自分のやっていることがどういう意味を持っているのかが、なかなかわかりません。ものすごく細分化された分業体制ができて、それをトータルに管理するシステムができました。時間をとにかく管理する。標準時間を作って、それをマニュアル化する。科学的管理法によって、生産過程そのものが管理される。労働に自分の思いとか、考えは、入っていかない。その余地がない、そういうシステムです。考えずに感情抜きになった方が生産性が上がるものだから、ロボット化とかIT化とか言われます。生産に対する労働者の主体的な関与を否定していくのが、[labor]の意味です。「labor」に対応する、流通過程、販売過程とは、モノひとつひとつがどんな風に作られ、売られるという、それぞれが別々のルートできます。生協も流通過程、販売過程

担っています。商品ごとに別々で、それを買う人間がどういう生活をして、何と何をやってどうやって生



活を組み立てているのか、そういう発想がなくなってきました。一つ一つの商品をどう供給するのかということから考えるようになってくる。それが合理化であり、効率性を追求することなのでしょうけど、そういう生産過程そのものが、消費者を作っていきます。消費文化、消費の強制化、このような形で、消費者を再生していきます。しかし、消費者とは売る側、供給者からの表現という気がしてなりません。生協が「利用者」という言い方される、違うはずだけど、似ている。微妙だな、という気がします。

働くことは生活するための手段という考え方は、ここに大きな問題があるような気がします。あたり前で否定しようがないけど、なにかおかしい。モノの生産が生命の再生産から分離してしまっている。逆に分離しているからそういう言い方がでてくるのではないか。生活・地域が生産に従属するということになってきて、働くことの外部として生命とか環境が配慮されなくなってしまう。

生きる（生活する）とは、自分が所有する身体能力を活用して、自分の生から快と満足を絞り出すプロジェクトであり、人生そのものが、働くことを介して、働くことを成功させることによって、自分の生活をより豊かな快に満ちたものにしていくということです。言い方を変えると、自分の命そのものが、快を得るための能力であり、資質であり、働くことが楽しいとか、人に喜びを与えとか関係ないわけです。

自分に能力がないとか、人に認められないからと、人は自死をする。就活でうまくいかないから自殺する人が増えています。自分に自信がない、能力がないということで、自分を抹殺していくけれど、それは思考の逆転です。生があってこそその労働で、成功している人も、失敗している人も、生命の連鎖の中で生きています。自死はその生命の連鎖を殺すことです。

以上

地域の中での居場所・地域でほっとできる場所！ 「けいわっこカレー食堂」

1月19日（木）津市にある社会福祉法人「みどり自由学園」（児童養護施設）で開催している「けいわっこカレー食堂」のお話を、三重地域懇談会世話人の6人で伺ってきました。みどり自由学園施設長中野様、地域担当米倉様に対応いただき、お聞きした内容の一部を紹介します。（文責：事務局）

1) 「けいわっこカレー食堂」のきっかけ ～地域に開けた施設づくり～

2016年3月31日に改正社会福祉法が成立、同日公布され、「地域における公益的な取り組みを実施する責務の規定」という項目が追加されました。社会福祉法人である「みどり自由学園」も、2016年度から地域担当を置き、どのような取り組みができるのかを考えてきて、この「けいわっこカレー食堂」を地域で実行委員会をつくり準備してきたということです。

まず、4月から子育て支援広場「みどりっこひろば」を開設し、

「みどり自由学園」の幼児などが参加し、遊んだりピアノを弾いたりする場を提供してきました。毎月1回（第3月曜日）に開催しているということです。そして、地域に開けた取り組みとして、学園の周りでも“かぎっ子”を見かけるので、地域を主にして「子ども食堂」やりたいという想いがあり、開催に向けて模索してきたということです。みどり自由学園には食事する場所やキッチンなどがあります。そして、いろんな縁で、学園の近くで子ども食堂をやりたいと思っている方がみえると情報があり、その方たちと実行委員会を立ち上げ、順調に子ども食堂の開催に至りました。

第1回「けいわっこカレー食堂」を2016年8月20日に開催し、毎月1回（第3土曜日）に開催しています。

2) 「けいわっこカレー食堂」を開催して

けいわっこカレー食堂は、地域交流を目的として開催してみえます。実行委員会形式で開催しており、「みどり自由学園」の職員も5名参加し、その他には地域の社会福祉協議会の方や津市の行政に関わる方がメンバーとして参加しているということです。

「けいわっこカレー食堂」には1回の開催で100名を超える参加があることもあり、保護者は同伴してもらい参加してもらっています。食中毒が少ないためメニューは毎回カレーにしているということです。今は1度に140食くらい作っているということです。

調理は細菌検査をしているので、みどり自由学園の職員で行っています。

みどり自由学園の卒業生の関係で寄付してくださる方がいらっしゃり、今は食材や寄付などはほぼまかなうことができているとお聞きしました。そんなことで食材にはお金はかからないということですが、行事保険や消耗品もあるため、大人のみ参加費300円です。

参加の対象は小学校区（敬和学区）の範囲で、チラシは幼小中まで全員に配布し、お知らせしてみえます。この小学校区には住民は7000名くらいで、その中に自治会が50くらいあり、説明にも行ったそうです。また、この地域は外国につながる方もたくさんみえ、高齢世代の方も多く、逆に子育て世代はあまり多くない地域ということです。小学校は全生徒200名くらいで、中学校は130名くらいの規模で、子どもの数はだんだん減っている地域だということです。

3) けいわっこカレー食堂ができて

これまで「児童養護施設」ということで、地域の方に“色眼鏡”で観られたりということもあったそうですが、「けいわっこカレー食堂」を始めてからは、学園の子も地域の子たちと同じだということがわかってもらえるようになり、壁がなくなってきた感じがするというものでした。

「けいわっこカレー食堂」を始めてから地域の方から、みどり自由学園の施設を「いきいきサロンで使わせてほしい」「風水害の避難所として使わせてもらえないか」など声をかけてもらうようになり、これからもさらに開かれたものになってほしいと思っているということです。

近くのコンビニでカレー食堂に参加してくれた子どもに会ったとき、「またカレー来てね」と言ったら、覚えていてくれ、近くで会ったら挨拶し合えるような、そんな関係づくりが少しずつできているそうです。「けいわっこカレー食堂」は地域交流を目的とはしていますが、不登校の問題や貧困対策にもつながってくれるといいと思っているということです。

以上



情報 クリップ



メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半頁 定価/ページ
<p>▶東日本大震災から 6年 被災地の今</p> <hr/> <p>NAVI 2017. 3 No. 780</p> <p>日本生活協同組合連合会</p>	<p>特集 東日本大震災から6年 被災地の今 第2 特集 組合員に支持される生協店舗の商品・サービス <コープのある風景> おおさかパルコープ <こんにちは!生協女子ですっ!> コープえひめ 天崎いずみさん <元気な店舗の取り組みを学ぶ> コープみらい コープ春日部店 <宅配・現場レポート> 鳥取県生協 <生協大好きママ コプ山さんの 教えて!CO・OP 商品> CO・OP 彩り 10 種のミックス・ベジタブル <想いをかたちにコープ商品> CO・OP 全粒粉ミルクチョコビス <今月のコープで笑顔がキラリ> とくしま生協 <エッセイ>東京台パース 小島慶子の 8,000 キロ通信 空からひとりごと <明日のくらし ささえあう CO・OP 共済> 庄内医療生協 <この人に聴きたい> 主夫芸人 中村シュフさん <ほっとnavi> みやぎ生協 コープ共済連</p>	<p>2017 年 3 月 A4 版 36 頁 360 円</p>
<p>▶ITを活用して実現を 目指す 組合員ファーストの事 業</p> <hr/> <p>生協運営資料 2017. 3 No. 294</p> <p>日本生活協同組合連合</p>	<p>●巻頭インタビュー わが生協、かくありたい! 東北全体での事業展開を見据え 東日本大震災からの復興の道のりを歩む みやぎ生協●代表理事 理事長 宮本 弘氏</p> <p>特集 ITを活用して実現を目指す組合員ファーストの事業</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 会員生協の仲間づくりの現場との両輪を成す 若い世代を意識した加入の入口を開拓 東海コープ事業連合●常務理事 根崎 周一氏 共同購入事業本部 副本部長 岸本 憲一氏 共同購入事業本部 運営企画部 部長 牧野 伸朗氏 2 高齢化の進むベッドタウンでの展開をきっかけに 地域住民のニーズに合った買い物手段を提供する ならコープ●専務理事 山中 教義氏 宅配推進事業 宅配推進 小売電気営業推進担当マネージャー 宇野 孝氏 3 物流やインターネットのサービスを統合し オムニチャネル的事業の展開に挑戦する コープ東北サンネット事業連合●常務理事 河野 敏彦氏 4 オンラインショップの成長を支える 「顧客勘定」マーケティング タワーレコード (株) ●オンライン事業本部 本部長 前田 徹哉氏 <p>●これからの店舗事業のあり方を考える 第6回 若手職員がアメリカの流通業から学んだのは ストアコンセプトとコミュニケーション エフコープ●店舗事業本部 本部長 大島 孝司氏 店舗支援部 惣菜SV担当 坂本 朋美氏 志井店 店長 岡島 ななお氏 折尾店 副店長 兼 惣菜主任 森 裕美子氏</p> <p>●全国生協の宅配事業・宅配センター運営を学ぶ 第18回 配送センターのイベントに300人が参加 宅配の認知度と組合員満足度を高める ユーコープ●宅配運営部 宅配営業企画課 佐藤 真理子氏 横浜北部センター センター長 平瀬 剛氏 横浜北部センター 供給マネージャー 田中 和也氏 横浜北部センター 主任 山田 康介氏</p> <p>特別企画 中国製冷凍餃子事件、その時会員生協の現場では コープみらい●代表理事 常務理事 熊崎 伸氏</p>	<p>2017 年 3 月 B5版 96 頁 定価870 円</p>

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 半型 版数/頁数
<p>▶災害からの復興に果たす “協同の力”</p> <hr/> <p>月刊 J A</p> <p>2017. 3 vol. 745</p> <p>全国農業協同組合中央会</p>	<p>特集 災害からの復興に果たす “協同の力” JAグループ熊本の取り組み ～ふるさとの復興に向けて JA熊本中央会 地域の復興はJAの復興から ～災害損失に係る会計・税務に関して 平野 秀輔（博士〈芸術〉、公認会計士 税理士） 命を守り災害に備えるために ～都市農業の役割 JA東京中央会</p> <p>オピニオンリーダーに聞く 尾木 直樹 きずな春秋 ―協同のこころ― 芭蕉は近江商人育ての親 童門冬二</p> <p>JAトップインタビュー 野菜産地強化に向け統一ブランドを目指す 中野 健二（徳島県JA板野郡 代表理事組合長） 展望 JAの進むべき道 新たなコメ需要の創出に向けて 金井 健（JA全中常務理事）</p> <p>海外だより [D.C.通信] 連載 70 「アメリカン KOBE BEEF」と地理的表示 中村 岳志 トピック 「がんばろう！ 日本の畜産・酪農」応援キャンペーンを実施中！ ～国産の肉・牛乳・乳製品の消費拡大を目指します！！ JA全中農業対策部畜産園芸対策課</p>	<p>2017 年 3 月 A4版 48 頁 年間予約 5,109 円(送料 消費税込)</p>
<p>▶“シングル化”する 高齢社会とどう向き合 うか</p> <hr/> <p>生活協同組合研究</p> <p>2017. 3 Vol. 494</p> <p>公益財団法人 生協総合研究所</p>	<p>■巻頭言 超高齢社会とすすむ孤立化 中川 浅行</p> <p>▶特集 “シングル化”する高齢社会とどう向き合うか 「単身急増社会」を考える 藤森 克彦</p> <p>シングル化の実態と問題の所在 一家族形成は解決になるか？― 筒井 淳也 おひとりさまを友人や地縁で楽しく過ごせるか 一脱・家族主義のなかで社会的な包摂を考える― 近本 聡子 「地域善隣事業」の実践から見えてきた新しい地域居住の形 白川 泰之 ひとり暮らし高齢者の食生活の課題と解決に向けた取り組みとは？ 石川 みどり・武見 ゆかり</p> <p>コラム1 協同組合の精神を想起し「拠点づくり」を進める ー地域の中で生まれ変わりを図るコープこうべー 松田 千恵</p> <p>コラム2 地域の資源を生かし、重層的に高齢者を見守る 松田 千恵</p> <p>コラム3 高齢社会における福祉用具・介護ロボットに係る施策の動向 五島 清国</p> <p>■時々再録 2題 忘れない 風化させない 伝え続ける 白水 忠隆 E V車を活用した一挙三得の再生可能エネルギー利用 白水 忠隆</p> <p>■本誌特集を読んで（2017・1） 渡辺 精一・川口 啓明</p> <p>■私の愛読書 ピーター・D・ピーダーセン（著）『レジリエント・カンパニー』 妹尾 成幸</p>	<p>2017 年 3 月 72 頁 B5 版</p>

お詫びと訂正

増刊・地域と協同の研究センターNEWS「地域と協同」No.6（2017年2月25日発行）にて誤りがありました。以下のように訂正し、お詫びいたします。

P. 33/研究センターNEWS編集委員・田所登代子氏の「ふりがな」正：たどころ とよこ

裏表紙/柴田 学氏の所属「協同組合コープあいち」正：生活協同組合コープあいち

お知らせ「増刊・地域と協同の研究センターNEWS『地域と協同』頒布について

No.6は頒布価格300円（税込・送料込）にて頒布いたします。また、No.1～5の頒布も対応（1,500円・送料込。数に限りあり・先着順）。ご希望の方は「地域と協同の研究センター」へお申し込みください。

申し込みアドレス：AEL03416@nifty.com

メインタイトル・特集など 刊行物名・発行所	目次・主な内容	発行年月 巻号 定価/頁数
<p>▶安心の地域づくりと 経営改革へ</p>	<p>農協組合長 インタビュー (36) 自分の国の食料は自分たちで賄う 横田 伊佐夫</p> <p>安心の地域づくりと経営改革へ! 文化連第8次中期事業計画 (平成29年度~31年度) 策定に向けて (その2) 伊藤 幸夫</p> <p>農村医学は世直し運動! ~ 私の歩んできた道 (24) 最終章 ~ 予防医学の心 小山 和作</p> <p>新型インフルエンザ県内感染期の実動訓練と 診療継続計画 (BCP) のシミュレーションを検証する 十川 康弘/野澤 彰</p>	<p>2017年 3月 B5版 88頁 文化連青報 編集部 03-3370-2529 *注</p>
<p>文化連情報 2017. 3 No. 468 日本文化厚生農業協同組合 連合会</p>	<p>アメリカの医療制度 (6) 階層的医療提供システムと SNP 高山 一夫</p> <p>韓国農業の実相 - 日本との比較を通じて (7) 米産業発展対策一その1 品川 優</p> <p>臨床倫理メディエーション (10) 国際比較からみる - 看取り 中西 淑美</p> <p>平鹿総合病院栄養科の取り組み (最終回) 伝統料理・行事食 後編 冬のお食事 石山 香</p> <p>全国厚生連統一献立 香川=いりこ飯、まんばのけんちゃん 伊丹 みわ</p> <p>院内感染予防対策と今後の病院の方向性 平成29年度厚生連院内感染予防対策研修会を開催するにあたって 仲川 賢治</p> <p>根拠を踏まえた発信を行いたい - [基礎] 研修会に参加して 佐々木 幸子 人と人を介して得られた具体的な情報 [アップデート] 研修会に参加して 岩佐 真弓</p> <p>第3回 LCC 事例発表② JA愛知厚生連における放射線危機管理と安城更生病院のCT運用について 柘植 達矢</p> <p>大型固定資産取得の価格交渉LCC評価を機器選定に活かした一例 沓野 隆</p> <p>平成28年度80列CT装置選定経緯の報告 窪田 和重 高いデータ分析力で地域医療へ貢献を</p> <p>第4回厚生連診療情報管理士研究会報告 片平 哲也 TPPは“生きた協定”である - TPPと医療・医薬品 寺尾 正之</p> <p>デンマーク&世界の地域居住 (94) オランダ: ゴールデン・エイジと市民社会 松岡 洋子</p> <p>生きがいづくり 助け合いのまちづくりシンポジウム報告 熊谷 麻紀</p> <p>熱帯の自然誌 (12) 私の暮らし カリマンタンの森にて (2) 安間 繁樹</p> <p>イギリスの社会的企業 女性のための社会的企業アカウント3 (4) 小磯 明</p> <p>●野の風● 日本人のよいところ/東 英子 <input type="checkbox"/> 自著を語る 『日本農業の危機と再生』 『現代ドイツの家族農業経営』/村田 武 <input type="checkbox"/> 書籍紹介 『動物がすき! イリオモテヤマネコをとおしてみたこと』/熊谷 麻紀</p> <p>▶線路は続く (108) JR最南端 指宿枕崎線/西出 健史</p> <p>▶最近見た映画 サバイバルファミリー/菅原 育子</p>	

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(♣)などを中心に順不同で紹介しています(主な内容は目次等から事務局が要約しています)。詳細は研究センター事務局までお気軽にお問い合わせください。

企画案内

静かな日常生活を取り戻そう！小松基地の経験から

自衛隊基地騒音へのとりくみ

岐阜基地所属の軍用機による騒音・爆音による市民生活への影響は後を絶ちません。日常会話や学校授業の中断など日常的となっており、夜間の離着陸訓練も行われています。各務原市はもちろん、岐阜市、愛知県犬山市、江南市、扶桑町など、影響は広範な地域に広がっています。自衛隊基地の騒音は、我慢できるものではありません。ご存じでしょうか。騒音被害は「受忍限度」を超えると、損害対象になります。今回の学習会は、石川県の「小松基地爆音訴訟」の取り組みを聞き、私たちの地域で生かすべき教訓を学びます。これらの取り組みは、平和、憲法を守るとりくみにもつながります。岐阜基地は、戦闘機などの試験飛行、操縦士育成など、自衛隊の重要な役割を持つ基地となっており、「安保体制＝戦争立法」で海外での戦争の下支えする役割さえ持つとしていきます。安倍政権の「戦争する国づくり」を許さない闘いを強める力になります。

日時 4月9日(日) 14:00~16:00

場所 各務原市産業文化センター 2F第3会議室 各務原市那加桜町2丁目186

講師 柴原和美さん

(小松基地騒音訴訟連絡会幹事・石川県平和委員会事務局次長)

資料代 500円

主催；岐阜県平和委員会 愛知県平和委員会

お問い合わせ/岐阜県：岐阜市徹明通7-13教育会館 TEL058-242-9701

愛知県：名古屋市東区葵1-22-26 民主会館4F TEL052-931-0070

書籍案内

なごや子ども貧困白書

編者：特定非営利活動法人子ども&まちネット 監修：藤田榮史

出版社：風媒社 本体価格：1,500円(税別)

サイズ：A5判並製 154頁 発行年月：2016年12月刊

内容：さまざまな現場から見えてきた子どもたちの届かぬ悲鳴...、そして若者を取りまく生活環境の異変...。すでに私たちの身近になっている貧困問題を考える。

目次：

なごや子ども貧困白書をつくる理由

～「なごや子ども白書研究会」で考えてきたこと～

第1章 子どもたちと子育て家庭の実態

第2章 子ども・若者の自立

あとがき

子どもの貧困対策の推進に関する法律

なごや子ども条例

風媒社ホームページより



地域と協同の研究センター 4月の活動予定

4月1日(土)政策提言チーム会合

4月8日(土)第11回三河地域懇談会

4月10日(月)常任理事会

4月13日(木)名市大寄付講義①

4月14日(金)研究フォーラム「地域福祉」世話人会、同「食と農」世話人会

4月17日(月)尾張地域懇談会・世話人会

4月18日(火)愛知の協同組合間協同と

2017 国際協同組合デー企画相談会

4月20日(木)名市大寄付講義②

4月21日(金)生協の(未来の)あり方研究会 63回

4月22日(土)第5回理事会

4月27日(木)名市大寄付講義③

2017年3月25日発行(毎月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 西川幸城

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP http://www.tiiki-kyodo.net/